

開催にあてて

研究と教育の好循環が学生に与える影響

Impact of a virtuous cycle of research and education on students

高橋 和子¹⁾

TAKAHASHI Kazuko

(2021年10月11日受理)

- I. はじめに
- II. 静岡産業大学の教育・研究を支える2本柱

I. はじめに

私の大学時代に印象に残った二人の先生と、大学教員になってからの同僚の先生を紹介し、研究と教育の好循環が学生に与える影響について述べることにします。

一人目は大学2年生の時に出会った金子明友先生(1927年～)です。先生は1952年のヘルシンキ五輪に体操選手として出場されました。その後、東京教育大学の先生になられて、日本の体操界で金メダルを一番とった加藤澤男さんを育てました。幸運にも私はその先生に器械運動の授業を習いました。国際審判員だった先生は大会があると、授業は休講になりましたので喜ぶ一方、残念でもありました。なぜなら器械運動の授業では、誰でもが出来るようになる「動きのコツ」を教えてくださいましたからです。どのようにしたら技が出来るようになるのかを目の前で具体的に指導されて、学生は魔法にかけられたように、皆出来るようになっていきました。根性を振りかざすことなど一切ありませんでした。このような先生に出会ったのは生まれて初めてであり、目から鱗という驚きを毎週味わっていました。その後も先生は、日本女子体育大学学長や国際体操連盟名誉メンバーも歴任されています。さらに、90歳を過ぎてもなお『伝承の道しるべ』(2018年、明和出版)を書かれ

ています。オリンピックにも通用できる選手を育てる指導者・教育者であると共に、生涯、研究者として活躍されておられます。

二人目は大学3年の時に出会った松本千代栄先生(1920年～)です。先生は東京教育大学とお茶の水女子大学を兼任されておられました。90歳を過ぎ『松本千代栄選集全5巻』『松本千代栄選集 第二期研究編全3巻』(2008・2010、明治図書)を発刊され、現在101歳です。先生は今で言うアクティブ・ラーニングのダンス授業を小学生に展開し、それが1948年CIE(連合国軍最高司令部の民間情報教育局)の教育視察団の目に留まって、「日本には子どもの主体性や創造性を育むダンス授業をしている凄い先生がいる」と高く評価されました。私自身が松本先生に感化されて、多くの恩恵を受けた点を少し紹介します。私は20歳の時、第7回テヘランでの国際会議(1973年)において、松本先生のレクチャーデモンストレーターとして、初めて海外に行く機会に恵まれました。中学校ではバスケット部、高校ではテニス部であり、大学に入って初めてダンスを行った私が、創作ダンスの領域で国際舞台で光を浴びることができたのです。そして22歳ではエリザベス女王の前で踊りフィリップ殿下と話すという光栄にも預かりました。松本先生は文部省学校体

¹⁾ スポーツ科学部学部長
Dean of the Faculty of Sport Science

育指導要綱作成委員(1947年)を27歳で務められました。時を経て私も、中学校・高等学校の文部科学省学習指導要領解説作成協力者(2008年告示・2017年告示)として関わることができました。このような機会に恵まれることを、大学時代は当然ながら想像できませんでした。人生何が起こるか分かりません。

三人目は、私が28歳で横浜国立大学(以下、横国)の教員になったときに出会った同僚であり師と仰ぐ伊東博先生(1919～2000)です。伊東先生は1949年、戦後初めての公式留学生としてミズーリ大学大学院でカウンセリングを学び、1952年から横国で教鞭を取られていました。先生はその当時の全教員の中で一番本を書いておられましたし、亡くなる直前に上程された『身心一如のニュー・カウンセリング』(2000、誠信書房)が絶筆になりました。先生は今で言うマインドフルネスのような内容を「道徳」の授業で実践し、教育学では“教えない教育”と称して学生が主体的に学ぶ授業を展開していました。一方の私は、赴任以前の福島大学では女子学生しか教えてこなかったのが、横国での男女共修ダンス授業をどう展開するか毎週苦悩していました。横国では全ての体育授業(柔剣道・サッカー・ラグビー等)が、1980年以前から男女共修だったのです。このこと自体はとても先進的な取り組みです。しかし、スポーツマンでルールのもとに技を競い合うことに青春を謳歌している特に男子学生が、自己を自由に表現するダンスの世界で、恥ずかしさから解放されあるがままを表現するにはどうすればよいか。その術を求めて伊東先生の研究室を尋ね、先生が提唱するニュー・カウンセリングを学び始めました。それが、40年経た今、静岡産業大学(以下、本学)スポーツ科学部開設科目「からだ気づき」に繋がっています。

これまで述べてきたように、私は学生時代の「できるようになること、自己効力感や創造性や柔軟性を持たせたこと、世界に向けて視野が広がったこと」が貴重な体験になりました。大学教員になってからも、先輩から多くの刺激を得てきました。それらのことが、今の私の研究・教育の礎になっています。

今回紹介した3名の先生方は研究者としても世界一流でおられ、先生方においては「教えること・研究すること」が一致していたと言えます。それこそが理想的な姿です。

II. 静岡産業大学の教育・研究を支える2本柱

静岡産業大学においても、学生にとっては多くの教員から影響を受け、教員同士も刺激しあう学び舎であってほしいと思います。そのために用意されているのが「全学研究発表大会」「ラーニングメソッド研究会」なのです。本稿では「全学研究発表大会」を述べるだけでなく、「ラーニングメソッド研究会」についても触れていきます。

「全学研究発表大会」「ラーニングメソッド研究会」は、学長主催で行われており、研究と教育を結ぶ本学の柱になっています。この会を通して、各教員の研究領域や教育への取り組みを知ることができますし、同僚を理解し、自身の研究・教育レベルを上げることにも繋がっています。コロナ禍以前は、磐田キャンパスと藤枝キャンパスで交互に開催され、参加者の移動には大学のバスが用意されました。このようなことを積極的に行っている大学は少ないと思われます。なぜなら、他大学は学部数も教員数も多く、開催しても参加者が少ないと推測するからです。

ここで、前任校の横浜国立大学のFDについて少し触れます。横国では2003年に大学教育総合センター(入学者選抜部・FD推進部・全学教育部・英語教育部)が開設され、私は初代FD推進部門長になりました。全国研究会では「学生による授業評価の意義と課題」の発表、教員の授業参観、他大学視察等を積極的に行いました。しかし、開設当時の経営学部や経済学部では、「FDの意義や授業改善は各教員がすればよく、学部組織として取り組む必要はない」と両学部長は言われる状況でした。それが全学部揃い、FDが盛んな大学として評価されるようになりました。どの組織も、時間がかかるものだと思います。

横国でのFD活動履歴を『平成16年度FD活動報告書』から紹介します。表紙「金魚鉢」の説明は次のようにされています。「横国開

学以来の初任教員研究会において「金魚鉢」というミニワークショップを行いました。授業での教員を金魚に例え、学生に見られている教員の姿(熱意・表情・貴重・ヤル気のなさ等)を教員同士の観察により浮き彫りにした企画です。FD活動はこの金魚鉢に象徴されます。学生の授業評価は教員の授業への鋭い視線。授業改善計画書は教員のモノログ。公開授業は他者との対話等です。」次の①から⑩は、FD推進部が2年間で掲げた「目的」と矢印はそれを受けた実践です。

- ①大学教育の在り方・教育理念・教育目標
→初任教員研修会・オープンセミナー
- ②カリキュラム改善
→2006年教養教育の抜本的改革への協力
- ③シラバスの改善→デジタル化への提言
- ④教育方法→公開授業・授業討論会を8回開催
- ⑤教育設備・教育機器→各学部の取り組み支援
- ⑥授業評価方法→ワーキンググループ設置
- ⑦教員の教育業績評価方法→各学部で検討開始
- ⑧教養科目・専門教育科目の授業評価
→全教養教育科目実施・専門教育は各学部
- ⑨FD推進部活動報告の作成→年2冊発刊
- ⑩教育上の改善策の全学への提案
→教育改革フォーラム開催
- ⑪その他のFD推進上の必要な事項
→FD専用HP開設・eラベル・教育相談



次に本学の話に戻します。本学では2021年度スポーツ科学部が開設され、2つの会のガイドラインも改正されたこともあり、これまでの経緯と展望を述べます。

「全学研究発表大会」

全学研究発表大会は、2006年度から実施され2021年度で16回目を迎えます。全教員参加のもと、各学部より選出された教員の専門分野に関する研究発表が行われます。すでに発表者は60名に及んでいます。つまり、60の専門領域の発表がなされたと考えられます。おそらく同じ専門領域の先生はいないので、他領域の研究者に「わかりやすく」「興味を持ってもらう」ように発表されてきたと考えます。このことは、学生に授業を展開するときと同様だと思います。「全学研究発表大会に関するガイドライン」(2021年7月21日施行)によると、開催目的は、次のとおりです。

静岡産業大学は教員の研究活動成果の学内教職員への発表の場として、学長主催による全学研究発表大会を年1回開催する。これを通じて本学教員の研究活動情報の共有を通じた研究活動の活性化を促し、本学の理念「“東海に静岡産業大学あり””といわれる、小粒だがキラリと光る個性ある存在になる。新しい大学を創造し、大学の新しいモデルとなる”ことを達成し、大学としての社会的存在意義を発信する。

この文章で特徴的なのは、全学研究発表大会を「研究活動成果の学内教職員への発表の場」として位置づけていることです。つまり、職員に対しても教員の研究を理解してもらうように努めることが謳われており、研究のサポート体制ができていると考えます。さらに「キラリと光る個性ある存在」としての大学になるには、大学を構成している教職員も学生も個性ある存在でなければならないということです。この大学の理念を読み込むと、改めて大変なことだと思いつつ同時に、身が引き締まる思いになります。

研究の観点では、スポーツ科学部の教員には外部資金の科学研究費取得者が多くいます。この研究費獲得の審査基準には「学術的独自性と創造性」がありますので、研究面では「個性ある存在」として評価されていると

思います。その他の「ふじの国大学コンソーシアム」「本学の特別研究支援経費」での研究も含め、全学研究発表大会が同僚の先生方の研究から多くの刺激を受け、自らの研究活動のヒントや切磋琢磨する機会になることを願っています。

「ラーニングメソッド研究会」

ラーニングメソッド研究会の前身は、2000年度から実施されてきたティーチングメソッド研究会です。教師目線ではなく学生目線に立った教え方の研究を行うために、2011年度に名称を「ラーニングメソッド研究会」に変更しました。外部講師の基調講演や学部教員による発表や様々な意見交換が行われてきました。2020年度のコロナ禍においては、遠隔手法による授業が多く実施されたことから、その検証と課題をテーマにした発表と議論がなされました。私もダンス実技をオンラインで行った事例を発表しました。そこで実感したことは、オンラインになったからといって授業方法が変わることはなく、日頃行ってきた双方向のグループ学習や問題解決学習を試行錯誤しながら、zoomのブレイクアウトルームを利活用して授業を行ったことでした。つまり、そんなに簡単に、自身の授業方法は変えにくいということです。ここで課題になることは、ラーニングメソッド研究会に参加すれば、自身の授業スタイル（教材内容・方法）を変容させるまでの機会になるのかということです。それ以上に、この研究会の目的は高いレベルにあるため、「ラーニングメソッド研究会に関するガイドライン」（2021年7月21日施行）の開催目的を確認します。

静岡産業大学は、ミッションとして掲げた、「新しい教育法、教育内容、教育水準により本学大学の社会的地位を確立する」を実践するために、学長主催によるラーニングメソッド研究会を年1回開催する。これを通じ、本学の理念である、「豊かな教養と、高潔な倫理観、人間愛、社会に対する広い貢献意識を備えた職業人、社会のリーダーの育成に努める。21

世紀の産業社会と国際社会の求める専門的職業教育を推進することに徹する」を実践し、高等教育機関としての社会的責任を果たす。

以上のことから、本研究会は全学研究発表大会開催目的と同様、単なる授業方法や内容の吟味にとどまらず、大きな目途の実現であることが分かります。特に「21世紀の産業社会と国際社会の求める専門的職業教育を推進する」以上、以下のことも範疇になります。

Society5.0 (狩猟社会→農耕社会→工業社会→情報社会に続く、新たな未来社会を指す)

SDGs (誰一人取り残さない持続可能で良い社会の実現を目指す世界共通の目標)

DX (デジタルフォーメーション: ITの浸透が人々の生活をあらゆる面でより良い方向に変化させる技術の活用によって、企業のビジネスモデルを変革し、新たなデジタル時代にも十分に勝ち残れるように自社の競争力を高めていくこと。日本では「2025年の壁」と言われるように、コストや人材をIT技術に割くことができず、ビジネスモデルへの対応が行えない弊害が生じ、大きな経済損失の可能性が示されています)

以上、「全学研究発表大会」「ラーニングメソッド研究会」の現状や展望を述べてきましたが、現在の在学生在が卒業する頃には、社会は大きな変化の渦中にいます。先を見通した研究や教育（授業内容・方法）を全教職員が行う必要に迫られていると思います。それを後押しするのが2つの会であり、教員各自の不断の努力とひらめきと自由闊達な精神と、それをサポートする大学の姿勢が重要になると思います。

参考文献：高橋和子・大正・昭和・平成を生きた身体論や表現論のパイオニアの実践論形成の経過とその継承：伊東博、野口三千三、松本千代栄、竹内敏晴。Research Journal of Japew.No35. pp1-24.2019